

告白対談

# 共産主義に感謝する！

堤清二

セゾンユーホレーション会長

中嶋嶺雄

東京外国語大学教授

若き日々の「革命」への陶醉、そして深い幻滅から、今日の自分たちはいったい何を待たのか

——おそらくは中国や北朝鮮の指導者も含めて、共産主義の歴史に終止符が打たれつつあるという時代認識から無縁な人は少ないのではないのでしょうか。また、共産主義国が崩壊した理由を歴史的、社会科学的に分析する議論もさかんです。しかし、共産主義、マルクシズムというイデオロギーは、歴史的な考察の対象であると同時に、多くの人にとって個人の内面の現実でもあったはずで、むしろその内面に降り立った総括のほうに、よほど難しいと言えるのかもしれない。

例えば、九月十九日付け『毎日新聞』の「記者の目」に、こんな文章がありました。

「万国の労働者よ、団結せよ」のあの有名なスローガンも、「立て、飢えたる者よ……」で始まるインタナショナルの歌

も、いまとなつては嘲笑の対象でしかない。／しかし、私は「本当にそうなのだろうか」という疑問が消えない。平等と公平さを求め、ユートピアに人生を賭けた人々の思想が誤っていたのだらうか。／日本を含め、世界では何十億という人々が社会主義のために人生を費やした。そのすべての人々の生き方が壮大なムダだったとはどうしても思えない」（石郷岡 建記者）

そして最後に、「社会主義とはいったい何だったのか」と、悲痛なトーンで問うています。かつて社会主義国に対する過剰なシンパシーを語り、その後、軌道修正、して言葉を濁してきた我が国の一部知識人に、この問いに対する明確な回答を求めることは絶望的でしょう。

堤さんと中嶋さんは、昭和二十年代から三十年代にかけて



の若き日に、現実の「運動」を通じてこの思想と深く関わり、しかも早くからきつぱりと訣別されている。それぞれ自分の体験の中から、どんな答えを出されたのでしょうか。

堤 僕は中嶋さんとコミユニズムとの関わりについて、まったく予備知識がないんですよ。

中嶋 僕は六〇年安保の世代ですから、堤さんとはちょっと時代が違うんです。

堤 あ、そうか……。

僕は、ソ連がペレストロイカ、グラスノスチの時代を迎えるようになって、じつは変な喜び方をしている一人なのではないかと思うんですね。これでマルクスやレーニンの本が自由に読めるようになったなあ、と。少し頭がおかしいんじゃないかと疑われているのかもしれないが（笑）。

これまでは、そうした原典を読むと、何処からともなく「天の声」が聞こえてきて「お前は修正主義者だ、分派主義者だ、党攪乱分子だ」と。もう、はるか昔に、僕は党には関係ないわけですのにね。いまや、その「天の声」が世界的に消えてしまった。ですから、マルクスの論文の、これは優れている、これはダメだと自由に評価することができるようになった。僕の読み方に賛成の人も反対の人も、自由にもの言えるようになったということです。

中嶋 なるほど。堤さんが東京大学で日本共産党の学生党员として活動されていたのは、昭和二十年代の半ばだったと思うのですが、その動機は何だったのでしょうか。

堤 いま、振り返って語ることになるわけですし、なにぶん自分のことですから、どこまで客観的な話ができるか、それはわかりません。とにかく、戦後の第一次全学連派の頃の共産主義運動の担い手には、これではなくては日本は救えないという意識があった。つまり、ナショナルイズムと共産主義とが、極めて幸せにドッキングしていたんですね。戦争で負けた日本に根強く残っていた前近代性のようなものを、この際、徹底的に無くしてしまわなければ、日本は欧米に追いつくことはできない。そうでないとソーシャル・ダンピングによる輸出立国、しかもその輸出立国という言葉の裏からは、国内市場が狭いからマーケットを確保するためにはやはり外国の土地を占領するしかない、という声が聞こえてくる。またぞろ帝国主義に逆戻りだ。そうなってはいかんから、とにかく民主化を徹底しなくてはいけない。平板に言ってしまうと、そういうナショナルイズムとマルクス主義が奇妙な結合をしていた時代だったんですね。

中嶋 そうでしたか。

今にして思えば吉田・岸は偉かった

堤 それから、僕個人の主体に即して言えば、まあ、理想主義ですね。ストイシズムと一体になった理想主義。考えてみれば、大まじめ中の大まじめだった、もう夢中になって活動しました。ある時、やはり学生も労働者の中に入らなくて

はいけないというので、オルグで三カ月ほど東芝の堀川町の工場に潜り込んでいたことがあるんですよ。労働組合の部屋に泊めてもらってガリ版刷ってピラを撒いて……。その後、党を離れ、十年ほど後でしようか、石坂泰三さん(経団連会長)当時)にお会いしたとき、石坂さんは十年ほど前、何をしていましたかときいたら、わしは堀川町工場の工場長をやっていた、とおっしゃる(笑)。

……ただ、いまになって振り返ると、めしを食う時間も惜しんで活動した、それはとても幸せな世界でした。僕はいま、ある大学で教えているのですが、僕の受け持っている四時二十分から六時までの時間帯は、キャンパスで学生たちが頻繁に楽しげにデートしている。楽しそうだな、とは思いますが、自分のいわばバリケードの中の青春とくらべて、さて本当に彼らは楽しいのだろうか、という気もしてくるんです。あの時代のこととは、実に鮮やかに記憶に残っていて、それが妙なことに、経営者として辛いことがあると、あの時やれた自分がこれをやれないことはないと考えるので、いい気なものです(笑)。

中嶋 すると、具体的な活動のターゲットは？

堤 私の学生時代は、まず二・一ストが潰れた後のレッドパージ反対運動でしたね。戦前は軍国少年で、それがひっくり返ったわけですから、もともとアメリカに対しては非常にアンヴィパレントな感情がありました。レッドパージの時代には、もう完全な反米ですね。昔の内幸町のNHKのビル

に、占領軍のCIE(民間情報教育局)の本部があって、そこに全学連を代表して抗議に行ったことがある。抗議の最中に急にシーンとなったので、何だろうと見ると、後の方に三十人くらいMPがいるんです。あ、これはもう終わりだ、と思うと、学生ですから急にヒロイックな気持になるんですね。これが自由の国アメリカのやることか、などと頑張っていて、とにかく無事に出ては来ました。

それから、全面講和運動……。全面講和論を唱えたわが尊敬すべき南原繁総長を、吉田茂首相が「曲学阿世の徒」と呼んだ、けしからん、という例の事件です。ところが、じつはつい先日、「文藝春秋」誌の特集に理想的な戦後の首相を挙げるアンケート特集があって、僕は吉田茂を挙げています……(笑)。

中嶋 私の場合は、堤さんとは時代がずれていて、六〇年安保直前の時期の全学連主流派だったわけですよ。「砂川」、「勤評」、「警職法」と来て、六〇年安保に流れこんでいく。このままでは日本がだんだんおかしくなる、と我々も危機感をもったんですね。しかし、いまになって考えると、あれほど非難された不人気宰相・岸さんはやはり偉かったと思う。

堤 ……………(笑)。

中嶋 堤さんにとつての吉田茂は、僕にとつての岸信介でして、当時は、戦前の東條内閣に連なってカビの生えた保守反動が再登場して来た、という受けとめ方をしていた。それ

で、「安保反対」「岸を倒せ」と盛んに叫んで国会を十重二十重に取り巻いたのですが、今日になって振り返ると、岸さんが大衆におもねらず、自分の信念を貫き通したからこそ、日本は日米関係を機軸に戦後の長い平和と繁栄を築くことができたわけですね。

近年、六〇年安保とは何であったのか、という議論が盛んにあった。ある社会学者は最近、あれは一種の反米ナショナリズムだと書いていましたが、当時、渦中に生きた私としては、それはちょっと短絡している、と思う。事実、我々には反米という意識はほとんどなかったんですね。六〇年安保の代表的な進歩的文化人として「今こそ国会へ」と唱えた清水幾太郎氏も、いわゆる反米ナショナリズムとは違っていた。当時、日本共産党は明らかに反米路線でしたが、その一方で六全協を経て「うたごえ運動」の、いわゆる民青路線に転換してしまいましたね。そうした反米・平和・愛国の路線に我等は大変不満だったわけです。むしろ直接、日本政府に対する反

体制の立場から、「反独占」の戦いによって日本の体制を变革するのだと、まあ、若気の至りでそう考えていた。同じ全学連でも、共産党に指導された反主流派が、ハガチー(米大統領新聞関係秘書)の車を包囲したりして反米運動を展開していたのに対して、我々は、日本の独占資本の代弁者である岸内閣に真向からぶつかって、これを倒すべきだという方針でしたから、当然、共産党とも衝突し、トロツキストとして盛んに批判されたりしました。

### 安保は敗北してよかった

堤 戦後の歴史の中で、やはり六〇年という年は大きな節目だったのでですね。いわゆる戦後民主主義についての幻想がそこでピリオドを打って、初めて新左翼が形成される。つまり、左翼運動の理想主義的部分と現実主義的部分が分裂して、後者、つまり日本共産党は、大衆を「うたごえ運動」

# 書新中公

《新刊》

1050 国際金融市場からの証言

日銀から見た激動の三〇年

太田 赴

日本が国際舞台に復帰後、G5の仲間入りを果たす過程を、中央銀行員の体験を交えて描く 定価6200円

1051 ニースキヤスター

エド・マローが報道した現代史

田草川 弘

ラジオの時代からTVの時代へ、常に全米に衝撃を与えた放送ジャーナリズムの寵児の生涯 定価6800円

1052 ショービジネス in USA

先導エンターテインメント産業の現状

鈴木 武史

本場アメリカの映画・音楽産業の軌跡と現状を語り、政治・経済などにおける効用を考える 定価6000円

1053 漱石が見た物理学

首座りの力から見た物理学

小山 慶太

熱、力、光、時間と空間。作品に登場する当時最新の話題を基に物理学激動の半世紀を描く 定価6000円

中央公論社

東京・京橋2-8 振替東京2-34

表示定価は税込みです

などに巻き込むなかで国会で多数を占めることを目指す。他方、学生たちは、そんなことでは権力は倒せないということ  
を六〇年の闘争で身をもって知り、その後の運動は昔のデカ  
ブリストのような、アナキーな性質を帯びたものに変貌す  
る。より少数に、より暴力的に、というプロセスを辿ること  
になるわけですね。

中嶋 ただ、当時の全学連は七〇年前後のときの暴力的な  
新左翼とは違って、堤さんの時代の戦後学生運動の流れも継  
いでいるし、その中で芽生えた一種の共産党批判、つまり反  
スターリン主義についても、かなりの共感を得ていたと思っ  
てます。その共感はいったい、何であったのか。何かを爆発  
させなければならぬという必然性のようなもの。それは学  
生の幼稚な議論としては、「反独占」であり、「社会主義革命」  
であったけれども、そんな戦略・戦術が全員を捉えていたわ  
けではない。あれほど多くの日本人が毎日のように国会を取  
り囲んだのは、結局、六〇年安保というものが、なされなけ  
ればならぬ戦後、日本という体制の総決算だったからではな  
かったのか。そして、岸内閣が倒れたから安保は民主主義の勝  
利だというのは社会党や共産党の受けとめ方であり、多くの  
市民主義派の知識人の立場でもあって、「総決算をした結果、  
敗北した」というのが我々の認識だった。安保のとき、文京  
公会堂で開かれた集会で、亡き竹内好さん（中国文学者）が  
「今こそ民主主義を」と演説されたので、僕は思わず「ナン  
センス」と野次ったりしたことあった。そして結局、「安

保は敗北してよかった」と考えるようになって、その数年後  
には皆、運動から離れ、それぞれの道を歩むようになる  
……。

しかし、そういう意味づけとは別に、僕にとって重要なこ  
とは、自分が感激した、例えば初期マルクスの世界と、運動  
の中の論理や組織論といったものが、いかに違っているかと  
いうことを、ほとんどすべての運動体験の中で見てしまった  
ということですね。共産党の運動のマイナス面を全部見た。僕  
の場合は、学生時代に共感した中国の社会主義や「毛沢東思  
想」の誤謬も間もなく見えてきた。そこから社会主義に対す  
る否定的な認識が、だんだん強くなっていきました。

堤 そう。そのマイナス面をすべて見る、しかも比較的若  
い時期にすべて見るといふこと。それは見た時には辛いけれ  
ども、後年、ものすごく得をしたという感じが僕にはありま  
す。

中嶋 それは本当にそうですね。

### 党籍がないのに除名される

堤 私の場合など、日本共産党を除名されると、その日か  
ら、昨日までの友達が本当に口をきいてくれなくなりました。

中嶋 堤さんが党を除名になったのは？

堤 ご存じのように、昭和二十五年にコミンフォルムが共  
産党を批判しますね。その二年後ですから、二十七年になり

ますか。要するに、コミンフォルム批判を契機に、党内が徳田球一の「所感派」と宮本顕治の「国際派」に分裂するでしょう。国際派の東大細胞は、徳田派の党本部にとっては目の上の瘤。なんとかこれを潰そうと、口実を探していたわけです。運良か悪しか、東大には堤という奴がいる、あいつの親父は右翼じゃないか、奴は党に潜入したスパイである、そのスパイに国際派は攪乱されている、というぐあいにはワッと書いた。父(堤康次郎)は経済人で民政党の代議士ですから、右翼じゃないんですが。

中嶋 摘発の論理としては、うってつけの材料があったわけですね。

堤 当時としては非常に説得力のある大衆操作の手段を、共産党本部は駆使したわけです。するとその日から、僕が話しかけてもすっと横を向かれてしまう。組織とは、権力闘争とはどういうものなのか、共産党という党はどんな構成要素で出来ているのか——自ら求めてそんな経験はできませんから、僕にとってはまことに得難い体験であったということですね。

中嶋 しかし、堤さんは学生時代、自分が堤家の御曹司だということを表に出さず、じつに真面目に活動していた、と私も聞いています。あの時代のことですから、当然、査問ということになったわけでしょう。

堤 そう。僕が「真面目に活動している」と言っても、「スパイほど真面目にやるもんだよ」ということになる。そ

の時に、必死になって僕を弁護してくれたのは安東仁兵衛(構造改革派として脱党、元社民連政策委員長)君ただ一人でした。だから、僕はいまでも彼とは人間的な付き合いをしている。

ところで、最近、僕からその時代のことを聞いた親切な知人が、わざわざ僕の党歴を調べたんです。

中嶋 ほう。

堤 そうしたら、除名された、というより、もともと登録されていないんですって。

中嶋 え、どういうことですか？

堤 自分自身、党員のつもりで、仲間もそう見ていた。しかし、どうも入党届けが資格審査で引っ掛かって地区委員会あたりでとめられていたらしいんですね。もちろん調べてくれた人も、中に入って自分で見たわけではないでしょうし、はっきりした事実にはわからない。ただ、僕はそれを聞いたとき、なにかすごく侮辱されたような反応が自分の中に起きて、それがおかしかった。じつは一九六二年に、僕はすでに父の会社に入っていました、所用で渡米することになったんです。ビザの申請はしたけれど、内心、ビザはおりないだろうと思っていた。アメリカはあの頃、たいへん厳しかったですから。ところがスーッと出してきました。あれ、アメリカの調査も大したことないな、とその時は感じたんですよ。ところが、どうも不名誉なことに(笑)、党籍がなかったんだな。

中嶋 その頃、堤さんがかつて共産党の黨員で、除名になつてゐるということは……。

堤 いわば周知の事実ですから、つまりこれは二重に不名誉なことだ(笑)。

中嶋 僕の場合も似たところがあります。東京外国語大学の自治会の委員長で、都学連の執行委員でしたし、全学連オクルグとして和歌山の勤評闘争にも深くかかわつたのですが、その間に共産党の北区地区委員会に入党届けを出しました。

殊勝にも、入党して中から党を変えていくべきだなどと考えたわけです。しかし、お前はトロツキストだということで入党拒否の形になった。現実には僕のアパートの部屋で細胞会議もやったりしたこともあるのだから、仲間は黨員扱いをしてゐたことになりませんが、地区委員会は最後まで僕を認知しなかつたんです。

まあ、當時を振り返つて、若気の至りといえはそれまでですが、何が自分を運動にコミットさせたかという問題をここでさらに問うならば、「このままでは日本はダメになる」という危機感とは別の、もう一つ個人的な動機が、おそらくそれだけの人間、堤さんにも私にもあつたのではないか、と思ふんです。

それは何かといえは、たとえば反体制運動、革命運動の真似事にはある種のロマンがありますね。それから、堤さんはストイシズムとおっしゃつた。なるほど堤さんのような環境に育つた人には、ストイックな行動、自己規制によって自分

を試してみたいという衝動に突き動かされるといふのもよくわかるんです。運動にコミットすることによって社会に参画してゐるという意識、あるいは、非常に充実した日々であつたと後に回想されるような高揚した気分、さらに運動のリーダーになれば自己陶醉やヒロイズムもそこになつたとは言いきれない。

堤 そうそう。

中嶋 もっと個人的には、若いですから恋愛関係、家庭の事情、その他の人間関係を含めて諸々の要素が人間を運動に駆り立ててゐるわけですね。おそらく、堤さんの場合はとくにお父さんとの関係があつたと思うのですが。

堤 そうです。「青春してゐる」という表現は、あまり良い言葉だとは思われないけれど、やはり反体制運動で青春を生きてきたことになりすから、一種のヒロイズムがたしかに僕の中にもあつた。大勢の学生の前で一席ぶつて、「入つた」と思う時と、今日のアジはどうもだめだつたと感じる時がある。「入つた」と思つた時は、おれは社会人になつたという気がしてすごくうれしいわけです。そうやって、だんだん『岩の中の青春』に深く深く入つていってしまうのですね。その後も何人ものリーダーがいましたね。唐牛健太郎、秋田明大……。

中嶋 僕たちの時代は、香山健一氏(現学習院大学教授)が輝ける全学連のリーダーでしたね。

堤 ……そして、僕の場合、たしかに親父に対するプロテ

ストと反体制運動が一体になっていました。

### 独裁者の相続人

中嶋 その意味で、これは余談になるのかもしれませんが、僕は堤さんの若き日を、ある人物の生き方と重ね合わせて考えることがあるんですよ。堤さんは、台湾⇨中華民国の総統だった蔣経国のことをご存じですか。

堤 知っています。

中嶋 彼は十五歳で家を飛び出して、ソ連に渡ってコミンテルンに入る。

堤 そう。それでソ連で結婚しているんですね。

中嶋 その家を飛び出す動機というのが、まさに父親に対する反抗なんです。

堤 あ、そうか。……そうだろうな。

中嶋 家を出て十年経った、一九三五年に、自分の母親・毛福梅に手紙を書いてそれを『プラウダ』に公開するんです。「母への書簡」——「あなたの子経国」と署名入りですね。当時の彼は、じつに真面目な共産党員だった。ソ連は素晴らしい国である、自分はソ連に住んでいることを誇りに思う、と書いている。その頃のソ連というのは、まだスターリン主義の猛威も……。

堤 それほどではなかったのかもしれない。

中嶋 ただ、この手紙は、父・蔣介石に対する弾劾文にも

なっているんです。

「あなたの過去の夫は極めて野蛮なる手段をもって何万、何十万という兄弟同胞を殺し、前後三回にわたって叛変——人を裏切って変わったということですね——し、前後三回にわたって中国人民の利益を売り渡した。彼は中国人民の仇敵であり、彼はあなたの子の仇敵である。自分はこんな父親を持つていることを中国人民の前で恥じ入らざるをえない」

堤 ほう。

中嶋 しかも、ご承知のように、経国の実の母親に対して、宋美齡が蔣家に入ってきたわけですね。ものすごい恨みが表現されている。「母上、あなたはまだ憶えているだろう！ 誰があなたを殴り、あなたの頭の髪を掴み、あなたを二階から階下へ引きずりおろしたか」。蔣家の内紛を、経国は十五歳前にすべて見てしまうわけです。「それは蔣介石ではないか。あなたは誰に向かって膝を屈し、追い出さずに家に置いてくれと頼んだか。それは彼、蔣介石ではないか」。これはおそらく台湾でも、まだ解禁されていない資料ではないかと思われます。

堤 すごい話ですね。

中嶋 蔣経国はやがてコミンテルンの有力な指導者になりますが、その後、父親のもとに帰って行くんです。堤さんもやがて、お父さんと和解され、西武の経営を担われることになるわけですね。

ソ連では、蔣経国というと、これまで転向者、反動という

評価だった。それがベレストロイカ以降、逆転しました。彼はウラルの重機械工場の工場長を務めているんですが、その時の彼の日記、工場の労働日誌、メモなどを全部調べて、ポロンツォフという人が最近論文を書いているんです。蔣経国はじつに真面目で、他人が働かない時に目立たないところで夜遅くまで働いた、外国人でありながら皆の推薦を受けて工場長になった、じつに人望があった、等々。論文のタイトルは「独裁者の相続人」ですが、相続人がじつに偉いという内容で、従来の教条的解釈とは全く違う。これを見ると、蔣経国という人が父・蔣介石の後を継いで今日の台湾を築いた大変な器であったということがよくわかりますね。

堤 しかし、それほど人望の厚かった彼が、なぜソ連を離れ、蔣介石と和解することになったのかしら。

中嶋 そこにはまだ謎が残されていると思います。一つには、スターリン主義がだんだん酷くなってくる中で、彼は、嫌疑をかけられるのですよ。親は蔣介石じゃないか、その彼があんなに熱心なのはおかしい、と。ですからそこも堤さんの過去に似ている。揚句の果てに、あれほど忠実な共産主義者であったのに、酷寒のシベリアへ追放されたのです。そこで彼は失望して帰国するんですね。そして父に再会する。父は父で、じつはあの時の状況では宋一族から美齡を迎えざるを得なかった、という事情を語る。

堤 親父の苦しさもわかってくるわけですね。

中嶋 だから、僕は堤さんの若い頃と、大いに共通すると

ころがあるのではないかと……。

堤 僕も捨てたものではない(笑)。

### 初期マルクスの変容

中嶋 ここでもう一度冒頭のテーマに還りたいと思うのですが、先日、堤さんは『日本経済新聞』(十月二十三日付け)に、やはり初期マルクスは生き残るという趣旨のことを語っていらっしやいましたね。非常に面白かった。

堤 先程も申しましたように、「天の声」が消え、自由に原典を読めるようになると、マルクスが政治運動にコミットし始めてからよりも、その前のほうがずっと面白いんですよ。

中嶋 僕も、堤さんの記事を読んで、若い頃を思い出してね、もう頁が茶色くなった『経・哲手稿』などを取り出してみたのです。ここに持参しましたが、「人間は人間としての関係を前提にした時、愛は愛とだけ、信頼は信頼とだけ交換できる」以下、若い頃惹かれた一節には自分で傍線を引いてある。いま引用した箇所はマルクスが恋愛について語っている唯一の部分なんです。『愛は愛とだけ交換できる』というマルクス主義の根本である、交換の原理、なのだから、片想いは愛ではないということ、それまで「結晶作用」というスタンダールの『恋愛論』に惹かれていた僕などは、この一節でマルクスにいかれたこともありました。この

ように個々のパッセージでは哲学的にも思想的にも人間として考へうる最高の緻密な論理を、あの二十代の若さで、マルクスは極めて柔軟に展開しているのですね。我々が普通、「共産主義」と言うと、ソ連共産党や中国共産党を思い出したり、文化大革命に言及したりします。しかし、初期マルクスにおける共産主義というのは、洗練された一つの哲学的空間であり、堤さんの分野からすると文学的な空間でもある。自己疎外の原因を私有財産に求め、それを積極的に止揚したところの共産主義というのですから、それ自体は、ソ連や中国の共産党、あるいは天安門事件、日本共産党などとはまったく違った空間なんです。

最近、社会主義や共産主義、マルクス主義がダメになったと言います。それはその通りですが、それではそのダメになった思想が、かつてなぜあれほど人類を捉えたのか、そこを説明せずに、ただ社会主義の崩壊に喝采しているだけではすまされなと思うのですよ。とにかく犠牲と代価があまりにも大きかったですから。スターリン時代について、ただスターリンが悪かったと決めつけるだけでは、なぜ、ソ連である時期、そんなスターリンがあれば大きな存在になり得たのかを説明されない。毛沢東についてもそうですね。それと同じように、ソ連共産党が倒れソ連邦が解体して拍手喝采というだけでは、二十世紀の人類を捉えたマルクス主義は何であったのかという根本問題は説明できないと思うんです。

堤 そうですね。それはたとえば、田中角栄という人物が日本をダメにしたという議論と似ていないでもない。田中角栄をけしからんと言うが、彼はある意味で戦後の日本を、物質的な繁栄以外に価値の基準は認めないという点で、もっともよくシンボライズした政治家だったわけでしょう。彼こそは戦後日本の体質そのものであって、そのことを踏まえての田中角栄批判でなくては、僕は受け入れられない。かつて人々の心を捉えた社会主義の崩壊についても同じだと思います。

それに社会主義が崩壊したといっても、何が崩壊したのか。中央計画経済と一党独裁の政治体制はたしかに崩壊しましたが、いったい何が崩壊すべくして崩壊したのか、どこが良くなかったのか、という議論も必ずしもじゅうぶんではないですね。

日本人は今日、全国民がホモ・エコノミクスになっていきますから、経済が崩壊すると全部が崩壊したと簡単に考える。そこから大きな欠落が生じてくるんです。たとえば、八月クーデターが失敗した、その背景についても、おそらく見落としている部分があると思う。ロシアなりウクライナの国民の立場でみると、あれはトルストイ、チャーホフ、ドストエフスキーを生み出した民族による変革だということですね。共産党などに占有されたくない愛国心は、それらの文学者によって代表される民族の良質の部分から出てきているのに、そのことに目を覆って、経済・政治的な見方、永田町の政変を

見るのと同じ見方しかできないと、情勢を見誤ることになってしまふ。

中嶋 そうすると、やはり問題の焦点は、なぜ十九世紀の最高の知的達成が、かくも非情な共産党の世界をもたらしただのかということになってきますね。

私も若い頃には、初期マルクスなどに随分惹かれましたが、同時に自分で運動にコミットし、研究者としては中国を研究し、ソ連や中国を始め、キューバや北朝鮮を含めてほとんどの社会主義国を訪れてその現実を目のあたりにしてきました。すると、マルクスの思想が国家という枠組みの中で強要される、つまり制度となり組織となった時に、もつとも非人間的な悲劇を招来し、ある意味でマルクスの思想とは全く違った世界が出来てしまうということがわかった。かといって、マルクスは正しく、あとに続く人々がまずかったと言うだけでは決してすまないんですね。そこで少なくとも、マルクスは思想家として、あるいは文学者として、そのまま置いておいたら永遠の存在になり得たかもしれない。それを彼自身が現実の運動の中に持って行ったところに大きな問題があったということは言えると思います。その点でレーニンの責任はマルクスよりももっと重い。

逆にいえば、おそらくソ連や中国がつくったような社会主義なら、必ずしも初期マルクスとは関係なく、誰でもあれぐらいいは出来たわけですね。そしてソ連にも中国にも、そういう少数派の革命運動が育たざるを得ないような土壌があっ

た。その土壌から、ある人々は正義に目覚め、潔癖感にとられ、ロマンを求めたのですが、それが運動体になり、やがて権力を握った瞬間から、今度は権力の維持を自己目的化して悲劇を招く、そのパターンを抜け出せなかった……。

堤 第二次大戦が終わったあと、じつはソ連社会をつくり変えるチャンスがあったんですよ。あれだけめちやくちやに破壊されたのだから、当面は従来の計画経済で行くしかなかった。それは日本でも同じことで、経済安定本部を作り、傾斜生産方式を編み出して、初めは統制経済を導入していたのですから。そして、ソ連の場合も、戦後しばらくすると自由経済を導入しても大きな混乱は起きない時代が来たわけです。ところが、共産党は自分たちの役人としての権限を重く見て国民を犠牲にした。つまり、マルクス主義には、それを否定する力が備わっていなかったということなんです。何といっても致命的な欠陥を露呈したことになります。

いま、モスクワではちょうど逆の現象がみられます。僕はソ連側の担当者に、「ここまで経済が落ちると、いくつかの部分は統制をもって維持するしかない」と意見を言うのですが、彼らは「それだけは勘弁してください。私達は計画という言葉だけを聞いただけで鳥肌が立つ」と言う。しかし、自由市場経済というものには、魔法の杖のひと振りですべてがよくなるというものではない。混乱のなかから本当のマネージメント力を伴った私的資本が生まれてくるんです。「それには十年はかかる」と言うのと、「とてもそんなには待てない、どうし

たらしいのでしょう」。堂々巡りなんですよ。

中嶋 マルクス主義の理論にある「絶対的窮乏化論」ではなしに、働いた者が上昇できるという社会的なインセンティブが生まれ、上に立つものは起業家精神(エンタープルーナーシップ)を持つようになってはじめて、経済は活力を増すわけですからね。

### 死ぬまで反共主義者にはならない

堤 その意味では、いまのソ連社会で問われているのは、福祉社会の問題だと言ってもあながち的外れではない。社会主義というのは、働かない人でも生活できる大変な福祉社会ですよ。おかしいじゃないか、たしか「働かざる者食うべからず」といったのはレーニンなのに、いつのまにか食えるようになってきている。どこでレーニンは逆立ちしたのか。

結局問題の焦点は、官僚主義、教条主義、権力主義が、いかに人間をダメにしているか、ということになってきますね。

芸術の分野の話になりますが、グバイドゥーリナとかシュニトケ、デニーソフなどといった作曲家がいて、じつにモダンな作品をつくっている。彼らはみんなスターリン時代を生きて抜いてきたわけで、作品は演奏を禁じられていたのに、それでも自分の感性に忠実に作曲活動を続けてきた。この粘り強さと抵抗力に匹敵するのは、日本の詩人でいえば第二次大戦下の金子光晴、西脇順三郎、中野重治さんくらいなものだ

しょう。

中嶋 日本ではまだほとんど知られていないのが残念ですが、ソ連の二〇年代のアヴァンギャルドで、やがて亡命した作曲家アルトゥール・ルリエの作品は、ギドン・クレームルのバイオリンなどで最近演奏されますが、彼の作品などはブレイネフ時代でさえソ連国内では演奏が禁じられていた。国外での演奏でさえ、ソ連当局からクレームがついた。

堤 ショスタコーヴィッチにしても、いつシベリア送りになるか、と死ぬまで安心できなかったわけでしょう。

中嶋 コミュニズムは、たしかに人々のロマンをかき立て、多くの人を惹きつけたけれども、逆に彼らをどんなに裏切ってきたか、そのコストは大変なものですね。

堤 プーシキンとかトレチャコフ美術館に行くと、そのことがありありとわかるんです。つまり、ロシア革命以前から素晴らしい作品を描いていた画家が、革命後しばらくは、引き続きとても高揚した作品を残している。ところがある年から、とても同じ画家とは思えない作品を描くようになる。その境界とみられるのは、スターリンの社会主義リアリズム宣言です。

私のところの美術館で、ソ連の「革命と芸術展」を三回やっている。フランスのポンピドゥー美術館に、ソ連に残っていた革命前の、美術史の欠落を補う作品がたくさん出ているというので、東京にも出してこれと、ソ連側と交渉したんです。おかしかったのは、ソ連側は、革命後の絵もいっしょに

並べるなら認めるといふ。最初、僕もそんなものは並べられないと言つて抵抗したんですが、ある時、ふつと考へた。待てよ、これは並べて掛けたら偉大な反面教師になるな、と。

それで前言を翻して革命後の作品も並べることにしました。すると果たして、誰が見ても、「これ、どうしたの」と驚くほどの違いがある。しかし、ソ連の役人にはそれがわからないう、というより、革命的な作品も出させましたとエクスキューズできれば、それでいいのですよ、自分の国が恥をかこうがかくまいが。官僚主義といふのはじつに怖いですね。

最近、僕はよくチェコのハベル大統領の話を経済人にするんです。彼は、共産党に反対する運動を担がれてしているうちに大統領になつてしまつた。この間、デンマークからある賞をもらつたのですが、その授賞式のスピーチがなかなかよかつた。自分は大統領の座にいる間、一日たりとも自分に対して疑いの眼を離さないつもりだ。いつ自分が、国の利益より自分の仲間や自分個人の利益を優先するようになるか、権力というものは死に至る病だ、と。コペンハーゲンでの演説ですから、キエルケゴールを踏まえてそんな表現をしたわけです。思うに、共産党の偉い人、たとえばスターリンが犯した罪の本質を一言で言えば、その死に至る病に冒されたんですな。しかも彼は冒されてから長く生き続けた（笑）。

中嶋 いずれにしても、社会主義の崩壊に伴う人間のドラマは、今後も随所に出てくるでしょうね。

堀 そうですね。まだまだたくさん出てくる。その時に、

人間的な部分でそうしたドラマに感応できるだけの経験をした我々は、ある意味で幸せだと言えるかもしれない。幸せだなどといつては、いい気なものだ、と叱られるかな。

中嶋 僕の場合も、自分が現代中国を研究し、あるいはソ連のことを勉強する際に、若い頃の体験がなければ、おそらく満足に現実を読めなかつたと思うんです。そこに自分の青春時代の一つの遺産が残っているような気はします。

堀 ただ、僕は自分に、おれは死ぬまで反共主義者にはならないぞ、という歯止めをかけているのですよ。じつは六〇年安保の時に、取材が殺到しました。かつて運動にコミットして今は体制内の人間。六〇年安保は社会人になつて間もない頃でしたからね。マスコミが誰かいないかと探すと、僕が浮かび上がってくるわけですよ（笑）。僕はその度ごとに断つて、断つていっているうちに、自分は反共主義者にはなるまいと思つた。お前はいいよ、おれは反共主義者にならなかつたら生きていけなかつた、という人もいるでしょう。それはそれでやむを得ない。しかし、少なくとも自分は理想主義でコミットしたのだから、自分を大事にするのなら、反共で売りこむような振る舞いは絶対、自分に許しちやいかん、と僕はそう考へたのです。

中嶋 僕も、コミニズムには怨みがある半面、それ以上に感謝したい気持ちもある。共産主義、社会主義には絶望したけれども、それでもやはりリベラルではありたいと思つています。